



JIC インフォメーション

第 180 号 2014 年 07 月 10 日

年 4 回 1・4・7・11 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジエーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



旅行・留学のお問い合わせはいつでも気軽にJICへどうぞ!
<http://www.jic-web.co.jp>

— イルクーツク —

鉄道は続く～モスクワ・ベルリン寝台急行の旅

神保泰興 (JIC 東京) 2P

ロシアで得たもの、失敗したこと

私のニジニ・ノブゴロド留学 6P

エストニア・レポート . . . トチンコ・ドミトリー . . . 8P

「ロシアのかわいい」発見の旅

マトリョーシカ・ツアー 10P

《本の紹介》ロシアのパンとお菓子 12P

ロシア新戦略 13P

キーロフ行進 (6) 歩きながらの対話 14P

JIC では、Jクラブ (JIC 友の会) 会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

ロシアからヨーロッパへ 鉄路は続く (下)

モスクワ・ベルリン国際寝台急行列車の旅

神保 泰興 (JIC 東京)

朝 8:43 にモスクワを出発した『モスクワ・ベルリン・パリ号』は約 5 時間後、ロシア・ベラルーシの国境近くにさしかかりました。前号に続き、列車の旅をお楽しみください。

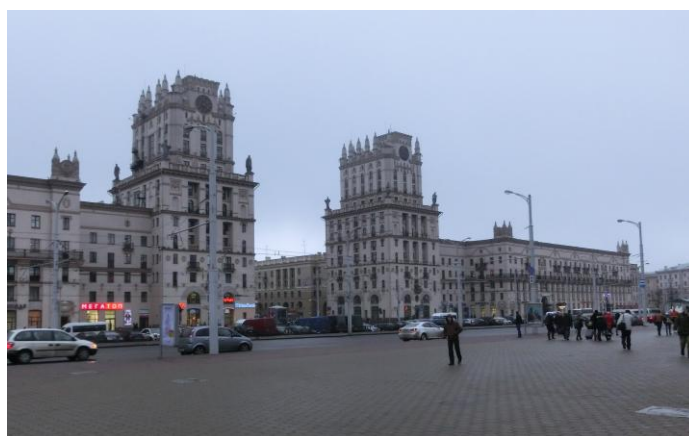
13 時 34 分、13 分遅れでロシア最後の停車駅・スモレンスクに到着。遅れを 3 分だけ取り戻し、13 時 36 分に 10 分遅れで発車。スモレンスクを出発すると、ベラルーシ側のオルシャまではもう 1 時間ほどだ。ここで時差調整のため時計を 1 時間遅らせる。

ベラルーシに入る。国境の緊張感なし

スモレンスクとオルシャの間でロシア・ベラルーシ国境を越えるのだが、ずっと車窓を凝視していたものの最後までどこで国境を越えたのかわからずじまいだった。両国間は EU 内と同じような自由往来の協定があるためである。

入国審査などは一切なく、定刻 13 時 35 分 (ロシア時間では 14 時 35 分) にベラルーシ最初の駅・オルシャに到着した。ここで 12 分停車する。国境の緊張感はまったく感じない。隣のホームにはミンスク行きのローカル列車が停車している。さっきまでぼんやり立っていたベラルーシの車掌が急に生き生きとして、乗客たちに盛んに話しかけてくる。私にも「外がきれいだからぜひ写真を撮りなさい」と言って、ホームと反対側のドアを開放してくれたりした。確かに、オルシャの駅舎は白壁に赤レンガの装飾がほどこされた美しい建物である。ロシアで見てきた駅舎とは違った印象だ。

列車はオルシャを出発しミンスクへとひた走る。ベラルーシに入ってから、車窓の景色は明らかに変化した。それまでずっと続いていた白樺やエゾ松の林に変わって、見渡す限り続く田園風景。あちらこちらに見える住宅は、古びてはいるものの、カラフルな一軒家ばかりである。



ミンスク駅

定刻より 1 分早く 16 時 05 分に列車はミンスク中央駅に到着した。せっかくなので、19 分間の停車時間を利用して駅前に出してみる。最近建てられたのであろう近代的な大きな駅舎だ。駅前には、政府関係の施設だろうか、巨大なネオゴシック風の建物がそびえている。当たり前のことだが、駅の案内表示はベラルーシ語、売店の通貨もベラルーシ・ルーブルで、ここはもうロシアではないことが強く印象づけられた。

ぼんやりしていると発車してしまうので、急いで列車に戻った。戻ってみると、隣のコンパートメントにいるロシア人のお婆さんに、別のコンパートメントの若者 2 人組がしきりとヤミ両替を持ちかけていた。

ミンスク駅で飲み物を買ってそびれたので、車掌室にお茶をもらいに行く。紅茶は 16 ルーブルだが、おつりが無いと言われ、一緒に何か買わないかと強く迫られる。勢いに押されて 40 ルーブルのビスケットをふたたび買うはめに。お湯だけもらうならタダなのだが、湯沸器は車掌室にあり、いちいち車掌に頼まなければならないのは煩わしい。どうやらこの車内販売にはインセンティブがあるようで、その後車掌の 1 人がカゴいっぱいグッツを入れてコンパートメントまで売り込みに来た。ロシア鉄道ロゴ入りのボールペン 100 ルーブル、同じくロゴ入り万能ナイフ 450 ルーブル。確かにレアものなので、ついお土産にとボールペン 5 本と

万能ナイフを買ってしまう。

ドイツに向かうおばあさんとの会話

外を見ると、いつのまにか雨が降り出して、霧も立ち込めている。次の停車駅のバラノビチまではおよそ 1 時間半だ。

隣のコンパートメントのロシア人のお婆さんはいつも廊下に出て外を眺めている。ふと、「あなたはどのようにして写真ばかり撮っているの?」と話かけてきた。日本の旅行会社に勤めていることを打ち明けると、「スパイと間違われるわよ」と笑いながら言う。「日本は島国なので列車で外国に行くことができないから、この列車の旅は日本人にとってとても興味深いものなんです」と話すと、「日本に帰ったらこの列車を宣伝してお客さんが増えるといいわね」と、お婆さん。今年 73 歳になるそうで、ドイツに嫁いでいる娘さんと孫に会うために年数回はこの列車で通っているとのこと。「どうして飛行機を使わないのですか?」と聞くと、「心臓が悪くて、気圧が変わると体によくないので、旅はいつも列車を使っているのよ」との答え。

「かつてロシアとドイツは戦争をしましたね」と話を転じると、「私は、戦争中はオリョール (ロシア西部の町) にいたのよ。あの時はドイツの飛行機がしょっちゅう爆撃に来て、とても恐ろしかった。まだ小さかったけれど、はっきり覚えているわ」。

「私も、祖父は二人ともアメリカとの戦争で死にました」と話した。「いまは平和で本当にいいわね」とお婆さん。まだ目的地まで時間はたっぷりあるので、どうぞごゆっくりと話して別れた。

食堂車再訪

17 時を過ぎ、霧はだんだん薄れてきたが、曇天も手伝って外は急速に夕闇に包まれていく。18 時になるともう外は漆黒の闇だ。ベラルーシ東部の交通の要衝・バラナヴィチには、定刻より 2 分遅れて 19 時 7 分に着いた。駅舎は小さいが、大量の貨物引込線があり、たくさんのコンテナ貨車が留置されていた。遅れを取り戻すようにすぐ発車。

そろそろ夕食が気になり出す。お昼の食堂車はえらく高かったのが、車掌に車販メニューに書かれているカップラーメンがあるか尋ねたが、ビスケットとチョコレート以外は在庫がないとのつれない返事。諦めて食堂車を再訪した。先客は誰もいない。ヌードル入りチキンスープ 300 ルーブルと、トマトスパゲティ 220 ルーブル、黒パン 2 枚を注文する。合計 540 ルーブル (約 1700 円)。

しばらくしてお客が 1 組現われた。特等車の客かも

しれない。身なりの良いカップルだが、ふたりでサラダ 1 人前をシェアして、ボルシチを食べているだけだった。チキンスープはそこそこ美味しいが、スパゲティはトマトソースが非常に少なく、なぜかチーズが大量にかかっており、それが溶けて麺がかたまりのようになっている。この食堂車から後ろはブレストで切り離されてしまう。閉店が近づき、まだ食べ終わっていない横で、片付けやら掃除機かけが始められる。しかし、最後の客だったので、厨房の撮影などを頼むと気軽に応じてもらえた。

ベラルーシからポーランドへ

19 時 45 分頃コンパートメントに戻ると、車掌にパスポートを用意しておくよう声をかけられる。ブレストに着いたらすぐに国境検査が始まるので、コンパートメントの扉も開け放しておくようにとのことだ。

20 時 04 分、定刻 5 分遅れでブレスト着。すぐにベラルーシの出国係官が乗車してくる。パスポートの写真と本人が同一人物かチェックし、ベラルーシのビザとロシア入国時に受け取ったロシア・ベラルーシ共用の



ブレスト駅での台車交換作業

入出国 (ミグレーション) カードを確認、パスポートを回収して引き上げていく。口調は丁寧で、威圧的な感じはない。出国係官が去るとすぐに女性の物売りが、ピロシキ、布林チキ、塩漬けキュウリ、ビール、などを持って、「飲み物は入りませんか」と小声で言いながら入って来たが、すぐ車掌につまみ出された。ほどなく別の物売りの女性に来るが、また追い出される。いちごっこが何度か繰り返されて、しばらくすると税関検査の女性職員が現れた。係官が来ると同時に列車はゆっくり動き出した。1 万ドル以上の外貨の有無を聞かれ、次に行き先と職業を聞かれる。私のポケットが不自然に膨らんでいたのも、それは何かと尋ねられた。ポケットに入っていたカメラを取り出して示す

とそれで検査は完了した。

乗客を乗せたまま台車交換

検査の間に、列車はゆっくりと大きな工場のような場所に移動していた。台車交換所だ。ここで列車は、



ロシア・ベラルーシの線路幅 1520mm の広軌台車から、1435mm の欧州標準台車に交換される。今回の鉄道の旅のハイライトの一つだ。

ジャッキで車両を持ち上げる

ここでも、物売りの女性が乗り込んでくる。停車時間が長いのもあるのだろうが、やはりこの地域の貧しさのせいだろうか。切実なものが伝わってくる。

台車交換所では、乗客を乗せたまま車両を一輛ずつ切り離し、巨大なジャッキで持ち上げる。これまで履いていた広軌の台車を外して、そのまま線路上をずらしていく。レールは広軌と標準軌両方の線路、合計 4 本が敷かれていて、ほどなく新しい標準軌の台車がレール上をころがって来る。こうして 1 つ 1 つ台車を履き替えさせるのだ。交換作業中は、トイレは施錠されていて使用できない。またデッキにつながる扉も施錠されている。台車の交換が完了すると、再び車両同士を繋ぎ直す。ずいぶん面倒なようだが、実際の作業は手際良く進み、1 時間ちょっとで台車交換は終了する。

21 時 30 分頃に作業が完了し、列車は徐行でブレスト駅構内に戻った。出入国審査の待機所で停車して 20 分ほどすると、車掌とともに出国係官が再び現れ、パスポートが返却された。ベラルーシのビザには出国スタンプが押されており、入出国 (ミグレーション) カードは取られていた。22 時 20 分頃に待機所から動き出した列車は、徐行のままベラルーシ・ポーランド国境を通過する。ここで時計の針を今度は 2 時間遅らせる。ポーランド時間の 20 時 30 分、定刻より 3 分早くポーランド側のテレスポール駅に到着した。

ちょっと緊張、ポーランド入国審査

10 分ほどして、ポーランドの入国係官たち (男性 2 名、女性 1 名) がコンパートメントを回ってくる。税関係員と思しき男性はコンパートメントのベッドを持ち上げたり、荷物をのぞいたりしている。パスポートを

渡すと、最終目的地とポーランド入国が初めてかどうか尋ねられる。その後、パスポートの識別コードを機器で読み取ったり、ルーペ型の機器を使って顔写真を確認したりと入念にチェックされ、ようやくスタンプが押されて入国審査は完了した。

耳をそばだてると、隣のロシア人のお婆さんのコンパートメントでは、入国目的やら帰国のチケットの有無やら、かなりしつこく聞かれていた。ベラルーシでの検査に比べると、かなり威圧感ある印象だった。

40 分ほど停車し、21 時 13 分に列車はテレスポールを出発した。ポーランドの車窓を期待したが、車外は漆黒の闇の中。列車は速度を上げ、一路ワルシャワへ向かう。

シャワーを使ってみる

ここで、シャワーを使ってみることにする。車掌に声をかけ、隣の 254 号車へ同行してもらう。車掌の鍵で「シャワー」と書かれたコンパートメントのドアを解錠し、使用方法を教えてもらう。ワルシャワ側に向か



って 1 番目のコンパートメント (253 号車だと、ちょうど私のコンパートメントに当たる) を潰して、シャワーユニットが設置されている。しばらく使われたた様子はない。ガラスカーテンを開き、上下 2 つあるつまみを操作してみる。上のつまみを左に回すと、上方の固定のシャワーヘッドから、

右に回すと可動のシャワーヘッドからお湯が出る。下のつまみは、左に回すと温度が上がり、右はその逆だ。シャワーユニット内には石鹸やシャンプー、タオルの備え付けはない。あらかじめ持参しておいたので事なきを得た。紙タオルは置いてあったので何枚か床に敷き、足拭きに使う。湯量はチョロチョロと少なめで、時間をかけて何とか洗い切った。給水が限られる列車だから、これは我慢するしかない。253 号車に戻り、車掌に声をかけて、ひと仕事が終わった。

ワルシャワは眠ったまま通過

コンパートメント内の机のふたをあけ、洗面台を出して歯磨き。不意に強烈な眠気に襲われ、23 時 42 分のワルシャワ到着を待てずに寝入ってしまった。

午前 4 時 54 分、定刻より 4 分ほど早くポーランド最後の駅・ジェピンに到着。客車が停車の衝撃できしむ

音で目が覚める。外は暗闇だが、屋根のないホームの明かりだけが煌々と周囲を照らしている。5 時 2 分出発。早く到着した分だけ停車時間を長くとったようだ。目をこらして見ると、周囲は長大な貨車の列でいっぱいだった。

列車は徐行で走り続け、5 時 15 分に一旦停車。9 分間そのまま動かず、5 時 24 分に再び走り出した。国境通過待ちだったのだろうか。暗闇のせいで国境を示す標識は何も見つけれられない。

ドイツ国境に到着

5 時 29 分、列車はついにドイツ最初の駅、フランクフルト・アン・デル・オーデルに到着した。駅がカラフルに彩られているのに気づく。いよいよドイツに入ったのだ。わずかな停車時間のあいだに係員が何やら積み込んでいる。ドイツ国鉄の車掌も 2 名乗り込んできた。そういえば、あのベラルーシ国鉄の車掌はどこで降りたのだろうか。外は引き続き闇の中。

食堂車はブレストで切り離されたが、ワルシャワでポーランド国鉄の車両があらたに連結されると聞いていた。営業開始の朝 6 時を待って食堂車へ向かう。ブレストまでは私が乗車している 253 号車の隣の特等車の先に食堂車が繋がれていたが、その後にそのまま連結したのではなく、わざわざ 253 号車と特等車の間に食堂車が連結されていた。特等車に他の乗客を通さないようにするための配慮だろうが、凝ったことをするものだ。ブルーの色調でコーディネートされたモダンな内装。ポーランド風スクランブルエッグ、パン、コーヒーのモーニングメニューで 450 ルーブル (約 1400 円)。支払いはルーブルでもユーロでも可能だが、クレジットカードは利用できない。



ベルリンに到着

列車はスピードを上げている。もうかなりベルリンに近付いているようだ。日の出前だというのに、通過する駅のプラットホームにはたくさんの通勤客が並んでいる。支払いを済ませ、コンパートメントに戻ると、列車は減速を始めた。定刻は 6 時 53 分着のはずだが、何のアナウンスもないまま、20 分も早い 6 時 30 分に列車は超近代的な三重構造ビルのベルリン中央駅・地下

ホームへとすべりこんだ。

列車はこの後さらにパリまで約 13 時間の旅を続けるが、私の乗車はここまで。ホームに降り立ち、モスクワからすっかり顔なじみになった 2 人の車掌に別れを告げる。機関車はベルリンで反対方向に付け替えられ、定刻 7 時 15 分に、発車ベルも鳴らないままパリに向けて静かに出発していった。

<国際寝台急行列車 TR23 の基本情報>

名称；TR23/24 (通称；モスクワ・ベルリン・パリ号)
始発地；モスクワ (ロシア)

経由地；スモレンスク (ロシア)、ミンスク、ブレスト (ベラルーシ)、ワルシャワ、ボズナン (ポーランド)、フランクフルト・アン・デル・オーデル、ベルリン、ハノーバー、フランクフルト・マンハイム (ドイツ)
終着地；パリ (フランス)

総延長；3177km

運行曜日と所要時間 (季節により変動あり) ；

モスクワーパリ間：月・木・日曜日 (夏季は火・土増便)

所要 38 時間 47 分

パリーモスクワ間：火・水・土曜日 (夏季は月・木増便)

所要 37 時間 30 分

連結車両；リュクス 3 輛、1 等車 2 輛、2 等車 3 輛、食堂車 1 輛 (季節により増減あり)

運賃 (モスクワーパリ／季節や購入時期により変動) ；
リュクス 1200EUR／1 等 550EUR／2 等 400EUR

⇒ チケット予約は、ジェーアイシー旅行センターへ

《欧州鉄道の旅・余話》

* 第二次大戦の結果、ヨーロッパの国境は大きく書き換えられた。現在はベラルーシ領になっているブレストは、かつてはリトアニア領で、第一次大戦でドイツとロシアが講和条約を結んだ町。1919 年にポーランド領となったが、1939 年 9 月ナチス・ドイツがポーランドに侵攻、ソ連とドイツによるポーランド分割の結果ブレストはソ連に併合された。戦後、ヤルタ協定で国境線が画定され、ソ連崩壊とともにベラルーシ領となった。

ドイツ・ポーランド国境の町、フランクフルト・オーデルはドイツの核心ともいえるべき旧プロイセンの中心都市だった。オーデル川をはさんで隣接するポーランドのスウビツェ市とは一つの町だったが、戦後、ドイツ国境がオーデル・ナイセ線まで西に大きく動かされたため、町の東側がポーランド領となった。冷戦終了後、国境の 2 つの町は融和に向けて動き出している。

国境をまたぐ旅の途中で、第二次大戦と現代国際政治、冷戦後の変化に思いを馳せてみるのもいい。(F)

私のニジニ・ノヴゴロド留学

石瀬 信也 (創価大学・学生)

ロシアで得たもの、失敗したこと



学生寮の仲間たちと (右端、筆者)

みなさんはニジニ・ノヴゴロドを知っていますか。普通の日本人で、「ニジニ・ノヴゴロド」と言われても、パッと頭に思い浮かぶ人はいないと思います。私が友人に留学先を教えた時も、地名を聞いて「ノヴゴロド」という別の町を思い浮かべる人が多かったです。このことから分かるように、ニジニ・ノヴゴロド(以下、ニジニと略す)は日本人にはあまり馴染みのない地域です。

留学の経緯

私は、2013 年 3 月から 12 月までの 9 ヶ月間、私費でニジニの大学に語学留学をしていました。私がこの町を選んだ理由は 2 つあります。1 つ目に、日本人が少ないということ。2 つ目に、語学力の低い学生でも向学心のある学生なら受け入れてくれる寛容な大学があるということです。これらの理由から、ニジニ・ノヴゴロドを選びました。

ニジニ・ノヴゴロドは、ロシアの首都・モスクワから東に 460km、ヴォルガ河とオカ河が合流する地点に位置する人口 130 万の工業都市です。また、ロシアの中でもクレムリンが存在する数少ない古都の一つです。自然が豊かでクレムリンから見るヴォルガ河はまさに「きれい」という一言で表現できます。私自身が感じたのは、ニジニは自然が豊かで、時間がゆっくりと流れる快適な地域でした。

たくさんの友人ができた寮生活

私は、寮生活 5 ヶ月間、ホームステイ 4 ヶ月間と 2 つの生活形態を経験しました。

まず、寮生活についてです。私たちの寮は門限が 23 時までと、割とルールが厳しい寮でした。しかし、大学まで徒

歩 2 分と、とても通いやすい便利な位置にありました。

一般にロシアでは 9 月から新学期が始まります。その時期に留学すると寮の部屋には、設備が整っていません。私の場合、学期途中の 3 月に留学をしたので、相部屋の人たちが購入したと思われる冷蔵庫や電子レンジ等が揃っていました。しかし、鍋やフライパン等の調理器具は各々の所有となっていたので、私も自分で現地調達することになりました。何かわからないことがあれば、寮の管理人の方が優しく対応してくれます。設備は古いですが、シャワーや台所は十分に使用できます。

寮生活で一番良かったことは、国籍が異なる多くの友人が出来たことです。留学する前の私は、先輩方の話を聞いて、留学生には中国人が多いというイメージを抱いていました。しかし、ニジニでは、シンガポール、アメリカ、イタリア、インド、ボリビア、コロンビア、ナイジェリア、トルコ、エジプト、パキスタン、中国等の様々な国籍の学生たちと交流することが出来ました。ロシア人だけでなく、たくさんの国のの人たちと知り合えたのは、大変嬉しいことでした。



寮では各国の料理をクラスメートで作る食事会も行いました。日本料理の食事会では、おにぎりを作りました。友人からは、「美味しい」と好評価でした。この時に改めて日本料理は素晴らしいと実感しました。イタリアのパスタ、中国の肉

炒め、インドの野菜炒めなどを食べることができ、お互いの交流を深められたと同時に、異文化交流まで出来て大満足でした。クラスでも彼らと共に 9 ヶ月間勉強できたことが私の誇りです。加えて、彼らの人間性にも大変惹かれました。学力に差があっても、心は温かく、一緒に居て楽しく過ごせる仲間でした。彼らとの思い出は一生忘れられない私の財産です。

ホームステイで生活体験

ホームステイもよい体験になりました。日本の大学の先生の友人を通してホームステイ先を紹介してもらいました。私がステイした家庭は、母、兄、姉、妹の 4 人家族でした。ホストファミリーには、様々なところに連れて行ってもらいました。

**ホストファミリーたちと**

お母さんの母親が編み物を仕事をしているということで、月に 1 回行われる市場に行きました。妹は乗馬を習っていたので一緒に乗馬クラブへも連れて行ってもらいました。ステイ先家族の友人たちが来た時には、アルコール度数 40℃のウォッカや 58℃の自家製酒を一緒に飲みました。さらに、一番下の妹(9 歳)とは雪合戦、そりすべり等の冬国ならではの遊びに興じました。どれも本当に宝のような思い出です。

家族の人たちには、ロシアの映画や音楽など様々な事を教えていただき、本当に色々学ぶことが出来ました。ロシアでは、日本のように言わなくてもわかるという事は通用せず、自分から発信していかないと相手からは何も行動に移してくれないことを知りました。逆に、ステイ先では自分の意思を伝えることで私が予想した以上の事をしてくださりました。本当に感謝でしかなかったです。ロシア人は公式の間ではめったに笑わないというのは事実ですが、実際に接してみると、内に優しい心をたくさんもった人たちばかりでした。

2 つの生活形態で過ごした 9 ヶ月間は常に「学び」の一言でした。

ニジニ・ノヴゴロドの魅力

ニジニ・ノヴゴロドの魅力は、冒頭でも述べたように、自然が豊かできれいなことです。時間がゆっくりと流れる田舎町であり、私にとって心安らげる場所でした。

第 2 にニジニは、首都モスクワへも観光名所である有名なウラジーミルやカザン等へも行きやすい位置にあります。シベリア鉄道の停車駅があり、他の地域への交通が便利です。

第 3 に、ニジニはヨーロッパ・ロシアに位置していますが、物価が安く、大学の授業料も安いところが魅力的です。ロシアは基本的に交通費が安いのですが、ニジニのバス料金はモスクワの 3 分の 1 でした。

他にも多くの魅力がありますが、ここでは、ニジニの魅力を 3 つだけ取り上げました。

留学で「得たもの」

留学を通してたくさん得るものがありましたが、ここでは 3 つ挙げたいと思います。

1 つ目は、自分の意思を自分の言葉で表現する大切さを学んだことです。日本では、話さなくても相手が「自分の思っていること」を察してくれることが多くありますが、しかし、ロシアではそのようなことは出来ません。

ロシア人や外国人は、言葉で表現しなければ、「自分の意思」を理解してくれません。だから、何事も遠慮をせずに思ったことは言うべきだと思いました。特にホームステイ先では、「洗濯したい時、お腹空いたときなど、遠慮しないで言いなさいよ」と言われていましたが、最初は中々言えませんでした。日本では、何かを言うと誰かに嫌われるのではないかと感じてしまう習慣がついていたからです。しかし、現地では自分の意思を示し、嫌なことは嫌だと言っても相手は嫌な顔をするわけではありません。そこで、私はありのままの自分を表現することの大切さを学びました。

2 つ目は、ロシアで長期滞在をすることで日本の生活環境の良さに初めて気づいたことで、今まで当たり前と思っていたことが実は当たり前のことじゃないのだと感じられるようになったことです。

ロシアでは、普段使用する水道水が、透明ではなく黄色や茶色の水が出てくることが多々ありました。水道水をそのまま飲むことは出来ませんでした。また、バスは、日本のバスと同じサイズの大きなバスと、マルシュルートカという小型のバスの 2 種類があります。マルシュルートカはとても運転が荒く、走行中に左右に大幅に揺れます。最初は酔いそうになったほどでした。さらに、お店では、レジの従業員が仕事中に携帯をいじっている姿が度々見受けられました。これらの点からロシアと日本の社会や生活環境の違いを実感しました。個人的には、ロシアのこのような雰囲気は嫌いではなく、むしろ好きなのですが、水道水に関してだけはもっと使いやすい生活用水にしてほしいと感じました。

3 つ目は、ロシアでは度々自分が予想する以上のことが起きるため、何事にも柔軟に対応出来るようになりました。その結果、私の心には、余裕が生まれるようになりました。

例えば、日本ではあり得ないことですが、ロシアではバスを 1 時間、2 時間待つのは当たり前です。特に 22 時過ぎになるとバスの量が減少し、長時間バスを待つことになります。他の例をあげると、ロシア人と遊ぶ約束をした場合、彼らは約束したその日に「何をしようか」と予定を決め始めます。地域によるかもしれませんが、ニジニでは日本人みたいに事前に計画して行動するという習慣が見受けられませんでした。そのため、最初はいつもロシア人の適当さに腹が立っていましたが、そのうちに、いちいち翻弄されていたらロシアでは生活していけないことに気づきました。そして、何事にも臨機応変に対応できる力が身についたと思います。

留学で「失敗したこと」

失敗したなと思うことも 3 つあります。

1 つ目は、語学力がほぼゼロの状態です。留学してしまいました。本当は、ロシア語を勉強し、ある程度身につけてから行くべきだと思っていたのですが、なかなか勉強することが出来ませんでした。結果、挨拶程度のロシア語力で留学に行くことになりました。

これが失敗だと思った理由は、日常生活における支障はもちろんですが、日常会話を話せるようになるまで 5 ヶ月間机上での勉強に費やした結果、外に行く時間が少なくなったからです。もし、ロシア語を日本である程度勉強していれば、積極的に外に出て、友人との交流や芸術鑑賞などにもっと時間を有効活用することが出来たと思います。

2 つ目に、私は変圧器とコンセント変換プラグの違いが分からず、変圧器を持っていきませんでした。その結果、現地でパソコンを使用した際に、日本製品のパソコンの充電器が電圧の違いに耐えきれずに壊れてしまいました。結局、現地で充電器を購入するはめになりました。これから留学に行く人達には、余計な出費を減らすためにも、事前にしっかり準備していくことをお勧めします。

3 つ目は、自分が日本のことに関して無知すぎたことです。私は、留学に行く前に日本の事をもっとよく勉強していくべきだったと思いました。

ニジニでは、ロシア人をはじめ、クラスの友人から日本について多くのことを聞かれました。「日本で有名なものは?」、「日本の美味しい食べ物は?」、「日本ではどの町が綺麗な?」、などなど。本当にいろいろなことを聞かれました。そのたびに質問に答えることが出来ず、悔しい思いをしました。一方で彼らは自分たちの母国のことをたくさん知っていました。悔しさと同時に、恥ずかしさがこみ上げてきました。だからこそ、自分の母国に関して、もっと知識を増やしていこうと考えています。この失敗の経験は、母国に関してさらに勉強していこうという意欲に変わりました。

以上が、私が留学から「得たもの」「失敗したこと」です。

留学は成長のチャンス!

最後に留学というものは、どの国へ行ったとしても価値観や考え方が変わります。留学した人は誰でも、物事の見方が変わり、広がると思います。だからこそ、日本の外へ出て、様々なことを学ぶ意味があると思います。世界は広いです。正直、日本という 1 国だけで過ごすことはもったいないです。私は、留学を通して成長することが出来ました。留学は、新たな仲間、新たな自分に出会えるチャンスです。

ロシア留学しようかどうか悩んでいるあなたへ、留学は、成長できる素晴らしい機会だと思います。是非、留学に挑戦してみてください!

《ジーマのエストニア・レポート》

ドミトリー・トカチェンコ (タリン大学・院生)

エストニアのリゾート地 ハープサル

5 月 末にエストニアのリゾート地 ハープサル (Haapsalu) に行ってきた。タリンから西へ約 100 キロ、車で 1 時間半で行けます。電車がバスだと 2 時間ぐらいかかります。

ハープサルは 13 世紀に創立されました。「ハープサル」とは、「山鳴るの林」という意味です。最初の 300 年間はドイツ人が作ったエーゼルヴィーク司教国の首都であり、16 世紀半ばにデンマーク領土になり、100 年後スウェーデンに占領されました。スウェーデン領だった期間はそれほど長くなかったのですが、その間に多くのスウェーデン人が移住して、ハープサルはエストニアのスウェーデン文化中心地になりました。エストニアのスウェーデン人 (いわゆる海岸スウェーデン人 rannarootslased) は、第二次世界大戦まで 1 万人ほどいましたが、エストニアがソ連に編入されたときにほとんどがスウェーデンに帰国しました。

ハープサルにはスウェーデン時代に作られたハープサル城があり、海岸スウェーデン人博物館があります。



18 世紀初めの北方戦争の結果、エストニアはロシア帝国の支配下に入りました。ピョートル大帝が泊った駅がいまでもハープサルに残っています。ピョートル大帝はロシアの新しい港の適地を探していました。

ハープサルの全盛期は 19 世紀半ばからです。ハープサル周辺の海の泥が病氣治療に効くことが知られ、エストニア内外からハープサルに治療に行く人が増え始めました。ロシアのニコライ二世はペテルブルグからハープサルまで鉄道を引いて、列車で家族と一緒によく出かけました。だから、ハープサル駅の建物はとても豪華です。現在はその駅舎内

に鉄道歴史博物館があります。

1918 年にハーブサルは独立エストニアの町になり、1940～1991 年はソ連の一部となっていました。ソ連時代にエストニアは国境安全地域に指定されていたため、ハーブサルは特別な許可書がなければ行けなかったのですが、1991 年からは自由に訪問できるようになりました。以来、再び人気のリゾート地になっていきました。ハーブサルは、北のフィンランド湾でなく、バルト海の外海の岸に位置するので、タリンより気候がいいですし、海もより温かいのです。



ロシアの有名な作曲家のピョートル・チャイコフスキーは、1867 年の夏をハーブサルで過ごしました。この町が気に入って、

「ハーブサルの思い出」というピアノの曲を書きました。今はハーブサルの海岸に、「チャイコフスキーのベンチ」があります。150 年前にチャイコフスキーが座っていたベンチではありません。ただのチャイコフスキー記念ベンチです。

多くのエストニアの小さな町と同じく、ハーブサルの中心部にはおいしいコーヒーやケーキの喫茶店があります。特に夏に行けば気持ちよく散歩出来る町です。ぜひハーブサルに行ってみてください！

タリン国際バレエコンクール

今年 3 月末にエストニアの首都・タリン市にて国際バレエコンクール(Tallinn International Ballet Competition)が開催されました。

タリンには、100 年前から「エストニア」というオペラ・バレエ劇場が存在しています。この劇場では、オペラ座とバレエ団が活躍しています。また、タリンとタルトゥには、国立バレエ学校があります。バレエの首都である Санкт・ペテルブルグに近いタリンのバレエ団は、「ロシア・バレエ派」を代表するバレエ団のひとつと評価されているのですが、ペテルブルグやヘルシンキでは大規模な国際バレエコンクールが行われているのに、タリンでは今までただ一度しかコンクールの開催がありませんでした。

バレエは芸術なので、誰が上手なのか決めるのは難しいです。バレエダンサーは、ソリストでもコール・ド・バレエでも、毎日何時間も練習しなければなりません。ただし、スポーツではないため、一番高くジャンプしたら一位という訳ではありません。演技と同様に、バレエには物語性や表現力が大事

です。高くジャンプするのも大事ですが、表現力で観客を感動させる方が上手と考えられます。

さて、今回のタリンバレエコンクールの主催者は、タリンバレエ学校でした。校長先生は、昔のエストニアのプリマだったカイエ・コルブです。コンクールには、世界 14 カ国(エストニア、日本、ロシア、ウクライナ、スイス、フィンランド、その他)から、約 60 名のダンサーが参加しました。年齢別に 4 グループに分けて審査が行われました。A グループ(10 歳～14 歳)、B グループ(15 歳～18 歳)はバレエ学校の生徒達で、C グループ(19 歳～25 歳)と D グループ(26 歳～30 歳)は、各国のバレエ団のプロのダンサーでした。

バレエコンクールの会場は、クーム(KUMU: Eesti Kunstimuuseum)というエストニア美術館内の舞台でした。美術館は、ピョートル大帝が奥さんのエカテリーナにプレゼントしたカドリオルグ公園の中にあります。美術館の中に 250 席のホールがあり、その舞台では国際会議からバレエ公演までいろんなイベントが行われます。



タリン国際バレエコンクールは、3 月 28 日にタリン旧役所にて、タリン副市長が出席して開会式が行われ、29 日、31 日にクラシック・バレエ、30 日にコンテンポラリー・バレエの審査が行われました。31 日夕方に受賞者の発表があり、そして一

番最後にガラコンサートが行われました。受賞者は各グループの女性と男性別に 1 位から 3 位までありました。

日本人の参加者も結構成功しました。D グループ一位は、ウクライナのキエフ子供オペラバレエ劇場で踊る長澤美絵、B グループ三位は上垣内唯予、コンクールのベスト・デュエットはクレムリン・バレエ団の小池沙織とエゴール・モトウゾーフでした。コンクールの結果や詳しい情報は、以下のサイトで見るができます。

⇒ www.tallinnballet.ee

次回コンクールは 2016 年の夏に行われます。日本からも、是非見に来て下さい。バレエをやっている方は、是非参加して下さい。

「ロシアのかわいい」発見の旅

マトリョーシカ・ツアー

セルギエフポサードで工場見学、セミョーノフ民芸フェアに参加



トカチェンコ・ドミトリー

6 月 11 日～15 日、もはや JIC の新しい伝統となったマトリョーシカ・ツアーの皆さん(11 名)がロシアを訪れました。いつものように、私もガイドとして参加させていただきました。短期間に内容ギッシリの旅行だったので少し疲れましたが、天気にも恵まれ、とても興味深く楽しい旅行になりました。

古都 セルギエフ・ポサード

6 月 11 日、グループはモスクワのドモジェドボ空港に到着。バスでセルギエフ・ポサードに向かいました。

セルギエフ・ポサードは「ロシアの鎌倉」といえるでしょう。首都から 80 キロぐらい離れている小さな古都です。有名なトロイツェ・セルギエフ大修道院(世界文化遺産)は、ロシア最大の修道院で、歴史的にも精神的にも重要なロシアの中心地です。創立者の聖セルギーは、ロシアで愛されている聖人の一人です。伝説によると、聖セルギーは森の中に住んでいて、木から玩具をいくつか作りました。時間が経って、セルギエフ・ポサードの多くの人が木の玩具を作り始めました。大修道院を訪れる巡礼者はいつもお土産として木の玩具を買っていきました。20 世紀に入りロシアでマトリョーシカ人形が作られるようになって、轆轤工の多いセルギエフ・ポサードでマトリョーシカが数多く製造されるようになりました。ツアーの皆さんが真っ先にセルギエフ・ポサードを訪問したのもうなずけます。

空港からセルギエフ・ポサードまで、交通渋滞に巻き込まれ5時間以上かかりました。翌 12 日からロシアの連休で、たくさんのモスクワっ子が郊外の別荘に向かったため、渋滞になったのです。

マトリョーシカの絵付け体験

12 日の朝、まず「アオフィス工場」にいきました。アオフィスは、工場といっても、轆轤工が一人、画家が数人というアットホームな小さな会社です。1時間半ばかり、轆轤工の実演を見学し、マトリョーシカの絵付け体験をしました。

その次は、セルギエフ・ポサード玩具博物館です。この博物館にはロシア最初のマトリョーシカが展示されています。1890 年代にモスクワの「子供教育」という工房でサンプルと

して作られた 7 個入りマトリョーシカです。ロシアのマトリョーシカの親戚(先祖かもしれない)と目されている日本のこけしや福祿寿の彫り物も展示されています。

午後は、市立歴史美術館内のマトリョーシカ博物館を訪れました。数年前に設立された展示室ひとつしかない小さな博物館なのですが、50 個入りマトリョーシカなど面白い展示品がたくさんあります。もちろん、トロイツェ・セルギエフ大修道院もしっかり見学しました。今年の 7 月は聖セルギー誕生 700 周年記念で大きな祭りが行われるので、準備の工事があちこちで行われていました。修道院の近くで買い物もできました。

ロシア最大の蚤の市「ベルニサーージュ」



トロイツキー聖堂 (セルギエフ・ポサード)

この日の夕方にモスクワに移動し、ヴェガ・ホテルに一泊しました。翌 13 日の朝、ホテル近くにあるロシアで一番有名な蚤の市「ベルニサーージュ」に行きました。マトリョーシカだけでなく、ロシアの帽子、プラトク(シヨール)、サモワールなどの民芸品が数多く売られています。

午前中いっぱい、ベルニサーージュでのショッピングを楽しみました。

午後は、バスでモスクワ中心部に移動して、アルバート通りのスターバックスでマトリョーシカ・タンブラーの買い物、「ドーム・クニーギ」本屋さんでチェブラーシカ絵本の買い物、「コンファエル」チョコレート屋さんでチョコレートの買い物と、買い物のハシゴです。

夕方、赤の広場に少し立ち寄って記念写真を撮ってから、ドモジェドボ空港に移動しました。国内便でニジニ・ノヴゴロドに向かうのです。モスクワからニジニ・ノヴゴロドまで約 400

ホフロマとマトリョーシカの町、セミョーノフ

セミョーノフ。このマトリョーシカ・ツアーの最大の目的地で
す。ニジニ・ノヴゴロド州の町のひとつで、ニジニ・ノヴゴロド
から80キロぐらい離れています。町は1644年に創立されま
した。人口24000人。名前の由来は、セミョーン(Семён)と
いう男性の名前です。伝説的な創立者は、セミョーン・ロジ
カーリ(スプーンを作るセミョーン)です。

セルギエフ・ポサードと同じように、セミョーノフの人々は



昔からいろ
ろな木製品を作
ってきました。昔
は家で使う食器
や家具を作って
いましたが、10
0年ほど前から
セミョーノフで
もマトリョーシ
カを作

り始め、20世紀後半にはセルギエフ・ポサードより多くのマト
リョーシカを作るようになりました。ただ、同じマトリョーシカで
も、絵柄は違います。セミョーノフのクラシックなマトリョーシ
カは、プラトークが黄色、エプロンが赤、頭に縮れ毛のような
模様があるのが特徴です。

セミョーノフが有名なのは、マトリョーシカよりもホフロマです。
ホフロマは、赤と黒と金で装飾された美しい木の食器です。
ホフロマ塗りのマトリョーシカはありませんが、食器をはじめ
いろいろな種類の小物入れが手作りで作られています。ホ
フロマやマトリョーシカを作る会社はたくさんありますが、ここ
セミョーノフには、ソ連時代から存在している工場がロシア



最大の民芸工場「ホフロムスカヤ・ロスピシ」(ホフロマ絵柄)
があります。そして、この工場は毎年6月にフェアを開催
しているのです。今回の私たちの訪問目的は、このフェア
に初めて参加することだったのです。フェアは14日、15
日の2日間行われます。私たちはその初日の前半に参加
することになっています。

セミョーノフの「黄金のホフロマ」フェア

セミョーノフの「パリージュ」という小さなホテルに一泊して、
14日の朝、まずはマトリョーシカ博物館に行って、小さな民



芸会議に
参加しまし
た。会議に
は、ホフロ
ムスカヤ・ロ
スピシ工場
の代表者、
州政府の
代表者、そ
してニジ
ニ・ノヴゴ
ロド日本セン
ター前所長
の浜野さん

ホフロマ塗りの食器

も出席しま
した。最近、ニジニ・ノヴゴロドとこけしの故郷・宮城県鳴子温
泉郷との文化交流が深まっており、私たちは日本を代表し
て鳴子こけしのプレゼンテーションをしました。会議の後、工
場の3人の美人画家に指導されてセミョーノフ・マトリョーシ
カの絵付け体験をし、併せてマトリョーシカ博物館の見学や
工場見学をしました。特に印象深かったのは「皇帝の間」で
す。その部屋はすべてがホフロマ絵柄で
埋め尽くされていました。もし購入するとしたらいくらぐらい
するのか、……、見当もつきません。

午後は、メインのフェア会場で、セミョーノフの町の中心
にあるレーニン広場に行きました。広場にはたくさんの露店

が出ていて、あちこちでセミョーノフやロシアの他の地方の民芸品が売られていました。しかも値段はとても安かったです。フェアの内容が事前に詳しく分かっていなかったのも、この日の夕方にはニジニ・ノボゴロドに戻る予定になっていました。時間が足りなくて買い物の時間が十分取れなかったのが残念です(もっと時間あれば、ツアー参加者の皆さんは、民芸品を全部買ってしまったかもしれません)。次は、セミョーノフにもう 1 泊してもいいと思います。

午後 3 時過ぎにセミョーノフを出発して、バスでニジニ・ノボゴロドへ戻りました。ニジニ・ノボゴロドはボルガ川とオカ川の間の高地に位置する商工業都市で、人口約 130 万人、ロシア第 4 の大都市です。中心部には、モスクワ同様にクレムリン(城塞)があり、美しい街並みが広がっています。作家、マクシム・ゴーリキーが生まれた町で、ソ連時代はゴーリキー市と呼ばれる閉鎖都市でした。

クリモフスクの玩具工場

翌日 15 日の朝、飛行機でモスクワに戻りました。日本への帰国便の出発までの数時間を利用して、ドモジエドボ空港近くのクリモフスクという町に行きました。クリモフスクには、

オリジナルの木の玩具を作っている工場があります。昔、クリモフスクの近くのバービンキ村に木工細工の轆轤工が多く住んでいたのです。最初のマトリョーシカを作ったズヴォーズドチキンは、バービンキの出身だと言われています。クリモ



フスクでは、1930 年代に設立された工場の見学に行きました。絵付け体験をする時間はとれなかったのですが、工場見学や買い物はたっぷりできました。

5 日間、随分盛りだくさんのプログラムで、ハプニングもありましたが、参加者の皆さんは大満足。とくにセミョーノフのフェアは楽しかったので、来年の 6 月にも是非マトリョーシカ・ツアーに来ていただきたいと思いました。皆さんも、是非一緒に来てください!

(写真は、筆者のトカチェンコ氏とツアー参加者の笹間結衣さんから提供していただきました。)

本の紹介

ロシアのパンとお菓子

荻野恭子著／東洋書店刊／定価；1500 円＋税

昨年夏に「カムチャツカの食文化と温泉を楽しむツアー」に同行いただいた荻野恭子さんが新しい著書を出版されました。日本であまり知られていないロシアの食文化の魅力を「パンとお菓子」を中心に、たっぷりと紹介しています。

本書では、ピロシキ(9 種)、伝統的なパン(11 種)、地方色豊かなパン(12 種)、紅茶に合うお菓子(8 種)のレシピが紹介されています。レシピはすべて、荻野さんが現地を訪ね、地元の主婦やシェフから教わってきたもののばかり。「ロシアのパンって、こんなにたくさんあるのか」とびっくりしました。説明がわかりやすいし、写真が豊富なので、誰でもレシピをもとに作ってみたいくなります。

しかも、これはただのレシピ本ではありません。味わって読めば読むほど、行間から『ロシアの生活と文化』が匂い出てきます。『残ったパンの使い方』というコラムを読むと、私たち日本人が残りご飯を、おにぎりや雑炊、お茶漬、焼き飯などにするのと同じように、ロシア人が残ったパンをパン粉やパン粥、パンスープ、揚げパン、フルーツや蜂蜜とのトッピング、果てはクワス作りなど、いろいろな工夫を凝らして始末していることが紹介されています。

「パン作りというと身構えてしまう方も多いかもしません。ですが、…、米文化の私たちが毎日のように、『米を洗い』『浸水』してごはんを「炊く」のと同じように、麦文化の方たちも『粉を練り』『休ませ』『パンを『焼く』だけなのです。どちらもほぼ同じ行程です。ですので、パンや菓子を作るのを特別なことではなく、生活の一部と考えてみましょう。」(本書 9 頁)という荻野さんの説明に納得。まさしく食を理解することは、その国を理解することだと思いました。(F)

著者紹介：荻野恭子さん

東京生まれ。父が飲食店を経営していたため、子供のころより食に興味を持つ。各種の料理学校で世界の料理を学ぶ。1974 年よりロシアをはじめ、ウクライナ、コーカサス、イラン、トルコ、中国、韓国など、ユーラシア大陸周辺の 50 カ国以上を訪れ、現地の家庭やレストランのシェフから料理を習い、食文化の研究を続けている。自宅にて料理教室「サロン・ド・キューズ」を主宰。テレビの料理番組や料理雑誌などで活躍中。「大地が育むユーラシアの味～ロシアの郷土料理」(東洋書店)、「家庭で作れるロシア料理」(河出書房新社)など著書多数。

⇒ <http://www.cook-ogino.jp>

本の紹介

ロシア新戦略

～ユーラシアの大変動を読み解く

ドミトリー・トレーニン著

河東哲夫・湯浅剛・小泉悠訳

作品社、定価 2800 円＋税

著者トレーニン氏は、カーネギー国際平和財団モスクワ・センター所長。ソ連/ロシア軍に勤務し、ゴルバチョフ政権では米ソ戦略核兵器削減交渉 (START) など外交交渉の最前線を担った。ロシアを代表するリベラルな政治学者で、現在のロシア・旧ソ連諸国について、バランスのとれた分析を行う専門家として評価が高い。

本書は、ソ連崩壊後の 20 年間の変化を跡づけて、ロシアと旧ソ連諸国の現状、ポスト帝国の姿をリアルに分析したもので、訳者解説の通り、まさに「ソ連崩壊始末記」とでもいべき大著である。

この 2 月以来、世界の耳目を集めているウクライナ問題、ロシアによるクリミア併合と東部ウクライナの内戦の行方を考える上でも、きわめて示唆に富んだ情報の数々を本書から得ることができる。

* * *

著者によれば、ソ連はイデオロギーと軍事に基礎を置く帝国だった。ソ連崩壊後、ロシアはソ連が約束した国際的義務を受け入れ、ソ連の在外資産とともにそれ以上の債務を引き受けた。また、ロシアはソ連の大量の核兵器と国連常任理事国としての地位を引き継いだ。ソ連を継承した国家としてロシアは、自らもまた外国からもみなされている。

第 1 章では、ソ連崩壊後のポスト帝国の状況が、領土と国境、国民国家の形成、経済力、軍事力、国際的地位などに分けて、多面的に活写される。

ロシアはかつてのソ連の約四分の三の領土を引き継いだ。人口はソ連の 2 億 8000 万人からロシア 1 億 4000 万人に半減したが、モスクワは同時にバルト諸国を統制する必要がなくなり、中央アジアやコーカサス諸国に対する宗主国的責任からも解放された。ロシアは独立した旧ソ連各国と条約を結び国境線を画定した。同時に、中国、ノルウェーとも懸案の国境線の画定を行い、未解決で残っているのは日本だけとなった。

ロシアと新しい東欧 (ベラルーシ、ウクライナ、モルドヴァ)、コーカサス (グルジア、アゼルバイジャン、アルメニア)、中央アジア (カザフ、ウズベク、キルギス、タジク、トルクメン) では、それぞれ独自の困難と問題をかかえながらも「国民国家」

(ネーション・ステート) の形成が進展している。

ロシアは、人口の 80% をロシア人・ロシア系住民が占めているとはいえ、内に 20 の民族自治共和国を抱える多民族国家であり、国民国家の形成は容易ではない。しかし、著者によれば、「互いに大きく異なる諸民族がロシア領内に併存していることが問題なのではない。……。一番重要なポイントは、近代的な民族国家とは社会が近代化の諸段階を経たあとで初めて立ち現れる、ということなのだ。法治主義、所有権の保証、市場メカニズム、社会的な結束、そして価値観といった仕掛けなしには、近代的な民族国家は形成できない。痛ましいことだが、今のところ (ロシアでは) これらの要素は欠落している。参加型民主主義を実現できた時に初めて、国民 (ネーション) というものが広範に成立したとすることができる。ということは、ロシアは全面的な近代化に成功して初めて、近代的な民族国家になれることができるのである」 (本書 113 頁)。

ロシアは「ロシア国民 (ロシヤネ)」としての実体をまだ獲得していない。

* * *

帝国解体後のロシアの行動原理を支える価値観は、①伝統的な大国政治へのノスタルジー (地政学的野心) と国益、②第二次大戦での勝利とその結果 (膨大な犠牲を払ってファシズムを打ち砕き世界史に貢献した歴史的偉業への誇りおよび国連常任理事国の地位)、③ロシア正教とロシア語に支えられたロシア文化のソフトパワー (ルースキー・ミール) であろう。

著者が言うとおり、今日のロシアは、国内社会の構造においても、軍事外交政策の目的においても、もはや帝国ではない。しかし、ヨーロッパやアメリカなど、いわゆる西側の民主主義と市場経済にもとづく国と同質かという、そうでもない。ソ連崩壊後の 1990 年代から 2000 年代初頭にかけて、エリツィン時代とプーチン一期目のロシアは、西側との統合を夢見て民主主義と市場化の道をひた走ったが、ロシア政治エリートの独特の行動様式が警戒感を引き起こしたために、また、結局のところ西側にはロシアを自分たちの仲間として受け入れる気がなかったために、失敗してしまった。結果として、プーチン二期目以降は、ロシアは西側への参入を断念し、「自立した大国」として行動する道を選んだ。しかし、この道もまた 2008 年の経済危機以降は行き詰まりを見せている。ロシアはなおも国際社会での新しい位置、新しい役割を求めて、模索を続けている。

* * *

紙面の都合で十分に紹介できなかったが、第 4 章・人口動態と移民、第 5 章・文化、イデオロギー、宗教も、ソ連崩壊後の 20 年間にロシア社会がどう変化したかを描いて、たいへん興味深い。ロシアという国とその行動原理をより深く理解したい人に、是非お勧めの 1 冊である。(伏田)

キーロフ十字架行進 (6)

歩きながらの対話

生活の一部としてのロシア正教

6 日目 6 月 8 日 ムリギノ村からキーロフ市へ

03:00 起床。眠い目をこすりながらトイレに向かうと、キッチンでこの家の主人、リュドミラさんが忙しく朝食の準備に立ち働いている。どうやら前夜から眠らずに朝の準備をしてくれていた様子。友達の友達の友達というだけの関係なのに、まるで昔からの親友のようにこやかな笑顔と快活な挨拶。世話になったお礼に何か日本の土産を渡したいと思うが、手元には何も無い。精一杯元気な挨拶を返す。

フレンチトースト、ブリヌイ、紅茶の朝食を美味しくいただき、04:20 に全員そろって出発。リュドミラさんが家の前で手を振りながら見送ってくれる。天気予報は雨と聞いていたが、空は曇空。雲の切れ目からうっすらと青空がのぞきかけている。

朝霧が立ちのぼるビャートカ川沿いの道を軽快に歩く。5km ほど先の休憩地(ギルソボ)まで、木立を縫って、ほどよ



い散歩道が続いている。道は地道だ。前日の雨の名残りで、ところどころに小さな水たまりがあるが、しつこい泥濘はない。ビャートカ川の両岸は自然のまま。生い茂る草の合間からゆったりと流れる川面が銀色の光を反射させながら顔をのぞかせる。

ギルソボはビャートカ川にかかる鉄橋の根元に広がる小さな町だ。やはり小さな教会があり、祈りの声が響いてくる道端で 40 分ばかり休憩。6:00 ちょうどに先頭の十字架集団が動き出したあと、少したってから私たちも出発する。ギルソボから先は、簡易舗装の一般道を 3 時間ほど続き、その先に



片側 3 車線の広い幹線道路がつながっている。幹線道路をしばらく歩くと、キーロフ市内に向かう分岐点が現れる。小雨が断続的に降ったり止んだりしているのを除けば、歩きやすい道だ。幹線道路では交通規制が徹底していて、車は 3 車線のうちの 1 車線だけを使って走り抜けていく。

同行のジーマ君が、ロシア正教のしきたりや日々の生活の戒律、行進しながら

参加者がしきりに唱えるアカフェストと呼ばれる聖典の意味などを解説してくれる。ロシア正教が属する東方正教会は、カトリック、プロテスタントと並ぶキリスト教の一大潮流なのだが、「キリスト教＝一神教＝絶対の神」という図式だけではよく理解できない。キーロフ行進をともに歩いてみた感触では、ロシアの人々の宗教観や信仰心というものは、ロシアの自然と社会に込みこんだ生活の一部として理解した方がいいような気もする。

今日で行進も最終日だ。ロシア人たちは何を思いながらこの道を歩いているのだろうか。

2 回目の休憩の後、9 時ごろに広い幹線道路に出たのを機に、人の列が横 5～6 列に広がった。キーロフ市内までもうすぐだ。行進の列にどことなくほっとした空気が漂う。先導役のジーマ氏一家や、ユーリー先生、セルゲイ氏、ロマン氏らと肩を並べてあれこれ話をしながら歩いた。

以下は、行進の合間の会話の断片を拾い集めたものだ。

ジーマ夫妻の場合；

この行進は子供たちの成長にとって大事な行事なんだ

ジーマ氏は 38 歳。キーロフ市内で「ミュンヘン」(ドイツ料理)、「アガタ」(ロシア料理)という 2 つのレストランを経営している。現在、さらに 3 つめのレストランの出店を準備中で、これは日本料理店になるそう。若いやり手のビジネスマンだ。

2000 年から毎年キーロフ行進に参加している。最初は、キーロフからベリカレツコエまでの片道だけ参加した。現在のようにコース途上に知り合いもなく、ずっと野宿して歩いた。足にマメができてひどい目にあった。「もう二度と歩かない」と思ったが、翌年からも結局、毎年参加している。「歩く心がすっきりするんだ。」

家族も引き連れて歩くようになった。息子のイリヤ(14 歳)は 6 歳から片道参加し、10 歳から往復参加した。往復参加は今年で 5 回目だ。ニキータ(10 歳)は今年で 4 回目の参加。最初はやはり片道参加で、今年初めて往復参加に

挑戦した。

「息子たちの成長にとってもこれは大事な行事なんだ。ニキータは最後までやり遂げと思う。」

妻のスベトラナさん曰く。

「時に泣きじゃくる幼子を抱えて歩くのは母親にとってはとっても辛いことよ。けれども、この困難な道を 1 年に一度歩くことで、ロシア人は本当のロシア人になれると思うの。信仰の意味を体感させるいい機会なのよ」

ユーリ先生の場合；

行進の目的は各人がもっと神に近づくこと

ユーリ・セルゲービッチ先生は 73 歳。1959 年に大学を卒業し、母校(高校)で文学の教師になった。専門はドストエフスキー。1970 年代に卒業間際のリュドミラさんを教えた。「リュドミラは『聖書研究会』というサークルを組織するなど、学生時代から活発な女性だった。ソ連時代でもそういうサークルは認められていたんだ。」

「弾圧の時代にも屈せず、ロシア正教を生きながらえさせたのは『女性たちの信仰の力』だ。」

ユーリ・セルゲービッチ先生は今回初めてキーロフ行進に参加した。

「できれば死ぬまでもう一度、もっと信仰を深く感じ取るために参加したい。ロシア正教の信者は皆、この行進に参加するとよいと思う。参加者が多いのはいいことだが、参加者がそれぞれ何を感じ取るかがもっと大事だ。ただ歩いたから信徒であるというわけではない。神を信じて歩いている人は、もっと神に近づくことができる。行進の目的は、各人がもっともっと神に近づくことなのだ。」

「歩いていると、楽な時、苦しい時、波があるのは当然だ。善と悪が心の中で争っているのだから。その心の葛藤が人を神に近付けてくれる。」

私のようなロシア正教の信者でもない門外漢が行進に参加することをどう思うか聞いてみた。

「神は愛だ。だから、ロシア正教の信者でない人が参加することも喜ぶべきことだよ。正教の信者でなくてもこの行進から何かを感じ取ることができるだろう。それでいいんだよ。」

セルゲイ氏の場合；

ロシアの大自然が信仰の力を育んだ

セルゲイ氏は、さほど熱心な正教の信者ではないと自分で言う。ただ、スピリチュアルなものには関心が強く、チベットや南米など世界各地のエネルギー・スポットを訪ねて旅行している。

「私が外国に旅行するのは、その土地のエネルギーを感じとるためだ。大自然のエネルギーを感じとることで心身をリフレッシュさせることができる。」

「このキーロフ行進では参加した人々のもつエネルギーを感じた。どんな困難にも耐えて、道を切り開く力をロシア人に与えているのは、ロシアの大自然であり、この自然とともに育

まれてきた信仰の力だと思う。」

ロシアの大自然と、ロシア正教の信仰と、どちらがより多くロシア人に力を与えていると思うか、ちょっと意地悪に聞いてみた。一瞬躊躇したセルゲイ氏は、しかし、断固として言った。

「それはやはり信仰の力だ。」

ロマン氏の場合；

「幼い娘に救われた」今でも思い出す

ジーマ氏と同年で幼馴染のロマン氏は、若い時ボクサーを 10 年ほどやっていた。今はキーロフ市内でオーダーメイド家具製造会社(従業員 30 人)を経営している。

「キーロフ行進には 7 年前に初めて参加した。それまでも何度か歩いてみようと思ったが、踏み切れなかった。ついに意を決して、友人と誘い合わせて 2 人で参加した。自分は全行程を歩くつもりだった。友人は前半の半分だけ歩くつもりだった。お互いにそのことに全く気付かずに、ベリコレツコエ村に着いて聖水の儀式を終えてから、それがわかった。友人は帰ってしまい 1 人残された。村の中をブラブラしていると、やはり後半 1 人になってしまったという仲間が 2 人も見つかった。それ以来、この時偶然一緒に歩いた仲間と親友になって、今でも付き合っている。」

「娘の名前はエヴァ。4 歳の時から参加した。1 年目は 1 日だけ、2 年目は 2 日間だけと、歩く距離を毎年伸ばしてきた。2 年目に歩いたとき、ザガリエ村で雨に降られた。雨宿りする場所もなく、娘を胸に抱いて雨の中を歩き続けた。すぐに帰るつもりだったので着替えもなく、ずぶ濡れで、本当にどうしようかと泣きそうな気持ちで歩いた。その時、5 歳の娘がむずかりもせず、『パパ、我慢するからね。私、大丈夫だよ』と気丈にも言ってくれた。娘に救われた気持ちになった。やっとの思いで歩き通し、仲間に追いついて合流した。仲間がタオルや着替えを貸してくれて何とか 2 日間をしのいだ。今でもしょっちゅう思い出す。あのときの娘の言葉が私に何とも言えないとても強い力を与えてくれた。」

「普段はそれほど信仰深く生活しているわけではないよ。毎週教会に行くなんてことはない。年中、仕事で忙しいし、酒もよく飲む。夜遅く家に帰って、家族とゆっくり話す時間もない。しかし、正教は私にとって生きるよりどころだと思う。この行進に参加することで、妻とも、娘とも、家族の絆は確実に深まった。」

ジーマ君の場合；

もう一度歩いてみたくなった

同行のジーマ君が言う。

「ロシア正教を本当に真面目に信仰し、様々な戒律を厳格に守って生活しているロシア人はせいぜい数%(4~5%)ではないかと言われている。ほとんどのロシア人にとって、ロシア正教は生活習慣の一部として受け入れられているが、その信仰の程度は実にさまざまだ。たとえば、毎日教会に行く

人はごく稀だし、断食のきまりなども多くの人が守っているわけではない。きまりを正確に知らない人も多い。若い人の中には、『あなたの宗教は？』と訊かれて、『ロシア正教という名の無神論です』という答え方があるほどだ。しかし、そういう人でも時には正教の行事に参加してみようかという気になるし、教会を訪れたりもする。これも事実だ。」

「実は、ボクもそんなに真面目にロシア正教の信者という自覚があったわけではない。今回初めてこの行進のことを知って、実際に歩いてみて、やっぱりもう一度歩いてみたいという気持ちになった。信仰について考え直す機会になった。」

日本人は無宗教？

歩きながら、宗教あるいは信仰の意味についてしばしば考えた。

一般に、日本人は宗教的な関心が薄いとか、宗教的に無節操だと言われる。よく引き合いに出されるのは、「日本人は、生まれた時は神社に宮参りに行き、結婚式は基督教の教会で挙げ、葬式は仏式で行う」というものだ。複数の宗教と平気で関わりを持つ日本人は確かに無節操に見える。あるいは、こんな数字もある。文化庁編集の宗教年鑑によると、2005 年に日本の各宗教団体が文化庁に提出した信者の総数は、2 億 1400 万人と、日本の総人口の 1.7 倍だった。内訳は、神道系が 1 億人強、仏教系が 1 億人弱、基督教系とその他の諸宗派が 1200 万人。各宗教団体が自己申告した数字を集計したものだから、多少の水増しはあるだろうが、それにしても 1.7 倍というのは、たとえば基督教世界では考えられないだろう。しかし、日本人はこの数字にあまり違和感を抱かない。つまり、圧倒的多数の日本人は、自身は信者という自覚がないままに、神社の氏子と仏寺の檀家の両方に登録されているわけで、しかもそのことをごく自然に受け入れている。このような状況を指して、「日本人は無宗教だ」という言い方も広がっている。

神道は、もともと自然界のあらゆる事物(太陽や海や山、大木や巨岩など)に神的なもの、霊的なものが宿っていると考える原始宗教(アニミズム)に発している。「八百万(やおよろず)の神」と言われるように、日本には様々な神が住んでいる。基督教やイスラム教のような一神教、「唯一絶対の神」というものは日本人には理解しにくい。一神教は、ただ一つ神を絶対的な基準として、その視点から世界を見る。善悪を判断する。しかし、多神教の世界では、神々に役割分担と縄張りがあり、どの神も絶対的な支配権を持っていない。日本人は自分の都合に応じて、いろいろな神様に挨拶し、願い事をする。いわば友達のように神様と付き合っている。仏教、神道は、宗教というよりも生活習慣として日本人の日常生活に深く溶け込んでいる。

日本人には理解しにくい一神教の世界観

このような日本人の感覚からすると、一神教の世界の人々は、唯一絶対の神を信じ、聖書やコーランなどに記された

「戒律」を日々の生活の指針として生きる敬虔な人々と映る。「日本人は宗教的に無節操だ」、あるいは「日本人は無宗教だ」と私たちが言う時、そこには一神教世界の人々に対するある種のコンプレックスないし警戒心のようなものが潜んでいる。私個人は無宗教というよりは無神論に近い考えだが、「八百万の神」を奉ずる日本人の生活伝統は私の中にも深く沁み込んでいるし、人が大きな困難や不幸に直面した時、心のよりどころを求めて一心に神や仏に祈る行為をまったく無意味だとは思わない。しかし、唯一絶対の神に自分の生き方すべてを委ねたいとは思わない。人間の理性や可能性をもう少し信じたいという思いが強い。

キーロフ行進の間中、なんとなく私が感じていた違和感とかいざなぎごちなさは、主としてこの宗教観の違いにあった。過酷で困難な行進にこんなに熱心に参加する人たちは、信仰心の篤い、熱心なロシア正教の信者に違いない、そんな中に私のような信仰を持たない人間が紛れ込んでいいのかという遠慮と距離感が、心の中にあった。確かに行進参加者は熱心な信者であることは間違いないのだが、しかし、歩きながらの対話を通じて、ロシア正教もまた生活文化の一部としてロシアの人々に受け入れられているのだと理解したとき、その距離感は一挙に縮まった気がした。

ロシアの生活文化としての正教

さらに、基督教を受容する以前のロシア人の信仰は一種の自然宗教だった。太陽、大地、とくに雷といった自然現象の中にひそむ神聖な力を崇拝していたし、森や川、野原に棲む精霊たちとごく普通に交流していた。ロシアの自然と大平原をこよなく愛するロシア人の心象風景は、万物に神性(仏性)を感じる日本人のそれと共通するものがある。

元来、ギリシャ正教(東方正教会)は土着主義を原則にしており、それぞれの民族教会の自治独立権を尊重してきた。ローマ教皇という超民族的な宗教的権威のもとでラテン語文化圏を築いたローマ・カトリックと違って、東方正教会は各国名、地域名を冠した組織を形成し、それぞれの民族語による礼拝を認めた。したがって、ロシア人は基督教をギリシャ風でもラテン風でもなく、ロシア風に理解し解釈することができたのだと言われている。キリストの教えは、ロシアでは教義体系や制度としてではなく、何よりも「心に神への恐れをもち、惜しまずに施しをなせ」という「生き方」として受け止められ理解された。

高橋保行著「ギリシャ正教」(講談社学術文庫)によると、西の基督教が、人間をまず墮落したものとみて、墮落した人間を救うためにキリストがきたと考える『原罪説』にもとづいているのに対して、東の伝統的な基督教は、人間が神に善なるものとして創造されたと強調する『性善説』にもとづいているという。このような東方正教会とロシア正教の特徴もまた、私にとっては多少なりとも親しみやすく感じられる。(つづく)